

月刊

2012

6  
月号

# みんぱく



今、ヨーロッパを考える  
あたらしくなったヨーロッパ展示

生活にぎざまれる農業のリズム 宇田川妙子

教会制度と人びとの慣習 新免光比呂

産業化とともに 森明子

多「民族」は共存できるのか 庄司博史

パンからみえる多様性と共通性 宇田川妙子



私がはじめて、フランスのブレイス（ブルターニュ）地方に赴いたのは、一九八二年である。地方文化の振興に熱心なミッテランが大統領になったのは、その前年の八一年。この年さっそくブレイス語（ブルトン語）の学士号が認可されるなど、地域的少数言語の復興の兆しが見え始めていた頃である。その中心地ロアソン（レンヌ）の大学にはケルト学科があり、そこに所属することになったが、ブレイス語の学習のために、民間団体による夏期講習など、いろいろと足を運んだ。

なかでも興味深かったのは、ブレイス語自主教育運動「デイワン」（「芽」の意）の本部事務所建設のために、労働をしながら学習するという講習会だった。「デイワン」は一九七七年に設立された自主教育学校であり、この頃には小学校もちらほら開校され、ようやく運動が軌道にのりはじめていたのである。食事は参加者全員による自炊なので、それは楽しいひと時だが、なにせ古い小学校の改装工事をしながらの講習である。春を迎える復活祭の休み期間だったが、暖房などもないので、夜はさすがに寒かったのをよく覚えている。

こうした講習会の利点は、ブレイス語復興に熱心な人々と知り合いになることができる点である。この講習会のあと、知り合いになった小学

プロフィール  
女子美術大学芸術学部教授。専門は西欧とくにケルト語圏の言語社会史。著書に『民族起源』の精神史——ブルターニュとフランス近代（岩波書店、2003年）、『ケルトの水脈』（講談社、2007年）などがある。



## 言語復興運動のネットワーク

原 聖

校教員の誘いで、三日ほど各地の運動家たちを訪ねて回ることができた。「青年の家」にはただで泊まれるなど、知り合いのネットワークは重宝する。

ところが、それから数日あと、テレビにこの教員の写真が登場して驚いてしまった。「ブレイス（ブルターニュ）解放戦線」の活動容疑者として逮捕されたのである。「解放戦線」はこの当時その活動がすでに下火になつていたとはいえ、エウスカル・ヘリア（バスク）の活動家との関係など、まだ多少は続いていた。「解放戦線」の活動家と直接知り合いになるのは、外国人研究者にはなかなか難しいが、かつて活動家だったという人にはほかでも何人か知り合いになることができた。

感心したのは、こうした活動家が比較的簡単に「社会復帰」していることである。おそらくこれは、カトリック的な「告解による許し」という、人生のやり直しを可能にする文化風土があるためだろうと思う。

あれからすでに三〇年である。「デイワン」は幼稚園から高校まで、四〇〇〇人の児童生徒を擁する学校にまで成長した。自主教育運動をはじめた世代は、いまだブレイス文化の中心的な位置を占めている。当時の「デイワン」運動のネットワークがいまでも有効なのである。

※（）内の地名はフランス語での読み方



<p>1 エッセイ 千字文 言語復興運動のネットワーク 原 聖</p> <p>2 特集 今、ヨーロッパを考える あたらしくなったヨーロッパ展示</p> <p>3 生活にぎざまれる農業のリズム 宇田川 妙子</p> <p>4 教会制度と人びとの慣習 ——東ヨーロッパのキリスト教を中心にして 新免 光比呂</p> <p>6 産業化とともに ——19世紀末~20世紀初頭のヨーロッパ 森 明子</p> <p>8 多「民族」は共存できるのか ——ヨーロッパのこころみ 庄司 博史</p> <p>8 コラム バンからみえる共通性と多様性 宇田川 妙子</p> <p>10 研究フォーラム 「感情」から開発実践を考える 関根 久雄</p> <p>12 みんなく Information</p>	<p>14 地球ミュージアム紀行 市民の都市生活と博物館 ハーレムのテイラー博物館とその周辺 稲賀 繁美</p> <p>16 連載リレー 知の収蔵庫 ボクシングの文化論 3の3 ゴング 樫永 真佐夫 多文化をあきなつ</p> <p>18 国境、障がいをこえる商い ——one village one earth—— 今井 孝子、和気 克子</p> <p>20 異聞逸聞 迷える「玉座」 田村 克己</p> <p>21 みんなく私の逸品 マザンキ マジエッツ・アグネシカ フィールドで考える</p> <p>22 文人が聴くドビュッシー ——ドビュッシー生誕150周年に寄せて 岡本 尚子</p> <p>24 次号予告・編集後記</p>
---	--

# 今、ヨーロッパを考える

## あたらしくなったヨーロッパ展示



チーズ用型 地域 ルーマニア  
標本番号 H021187

ヨーロッパは、南北、東西と、多様な地理的条件を背景に、各地でさまざまな文化をはぐくんできただけでなく、大航海時代以降は、キリスト教や近代の諸制度をはじめ、多くの技術や知識を世界各地に移植してきた。そして現代、今度は世界中から移民が流れ込み、移民たちの文化もヨーロッパ社会の一部になり始めている。

こうした歴史のなかで大きく変動しながら、差違と共通性とは複雑に綾をなしてきたヨーロッパ。その多彩で多様なありさまを、「リニユーアルされた展示の四つのセクション」生業と「一年」「宗教・信仰」「産業化とともに」「変動するヨーロッパ」に即してみよう。



街角では、移民は風景の一部となっている



アルプ行列人形 地域 スイス  
標本番号 H0092220 ほか



煙突付きアイロン 地域 ポルトガル  
標本番号 H0151186



陽気な墓 地域 マラムレシュ、ルーマニア  
標本番号 H0211880



LUI DUMNEZEU M-AM  
RUGAT FOARTEMULT  
MA AJUTAT SA FA-  
CETI SI VOI CA HINE  
CO SA FIE TOTUL  
BINE PE COPII I-AM  
INVATAT SA FIE DE  
CINSTE IN SAT CA  
MIE A SA M-0 PLA-  
CUT PE OAHENICA  
SAI AJUT.

## 生活にぎざまれる農業のリズム

うただわ 妙子 民博 民族社会研究部

ヨーロッパの生業は、麦作と牧畜の組み合わせを中心とするものである。たしかに現在ヨーロッパは、農業と結びつけて語られることは多くないし、自然に対する意識も、日本人に比べると敏感でないといわれる。しかし、農業は今でも彼らの重要な産業のひとつであり、彼らの生活も、そのリズムをとおして自然と深くかかわっている。

### 六月の聖体祭

たとえば五月後半から六月。この時期イタリアでは、聖体祭とよばれるカトリック教の儀式が各地でおこなわれる。聖体とは、ミサの際に食される聖別されたパンのことで、キリストの

身体が実体化したものとされている。聖体祭はその聖体にちなんだ祭りだが、同時に、花を街路や道路に飾る祭りとしても知られている。

なかでも有名なのは、ローマ近くのジェンツァーノという町の花祭り（インフィオラータ）だ。町の中心の大通りに、バラをはじめとするさまざまな花びらで、絵や模様を描きつばいに描かれる。その花のカーペットの上を、聖体を掲げた宗教行列がおとる姿は圧巻である。

### 農業のサイクル

イタリアの農業のサイクルは、日本の米作とは違って、晩秋のころを起点とする。麦の種まきは多くは秋から冬にかけての時期におこなわれるからである。しかし冬になると、生活の場は次第に屋内へと移り、長く暗い冬を経てようやく春が訪れる復活祭のころ（三月後半から四月）、農作業が再開する。そして夏になれば、すぐに牧草用の草刈りや麦の収穫が始まって多忙となり、ブドウなどの収穫の秋へと続いていく。

ゆえに聖体祭がおこなわれる五月から六月にかけては、その農繁期の前、まだ余裕のある時期でもある。木々や花々も盛りとなり、都会に住む人びともその自然を楽



9月はブドウの収穫の季節。家族総出で収穫し、自家製のワインを仕込む人は今でも多い

しむために、郊外にピクニックに出かける習慣はむかしから続いている。花をモチーフとする聖体祭が、こうした生業と季節のサイクルのなかで春を謳歌する祭りとして位置づけられていることは明らかだろう。

### 展示の構成

リニユーアルした展示では、「生業と一年」のセクションで、以上のような農業のサイクルと人びとの生活のつながりを紹介している。

まずは、翌年の農作業のための準備と冬用の保存食作りなどにいそしむ「秋から冬へ」のコーナーでは、冬季の屋内での家具作りなどの仕事



ジェンツァーノの花祭り（1987年）。  
花祭りは神戸でも1997年からおこなわれるようになった



クリスマス人形「キリスト降誕」  
地域 フランス  
標本番号 H0216947



木靴 地域 フランス  
標本番号 H0003426

## 教会制度と人びとの慣習 ——ヨーロッパのキリスト教を中心にして

新免 光比呂 民博 民族文化研究部

についても展示した。「冬から春へ」は、この時期、クリスマス、新年、カーニバル、復活祭など、冬至や春分という時間の節目に合わせた祝祭が数多くおこなわれていることに注目した。そして「夏から秋へ」では、夏至以降、牧草刈り、麦やブドウなどの収穫、ワイン作りなどが続き、秋の収穫祭とともに農業のサイクルが終わる様子を、その作業にかかわる農具を中心に展示している。一方、豚、牛、羊などの牧畜は一年をとおしての仕事であり、特にその乳の利用については「酪農」のコーナーで示した。

生き続ける季節のリズム

ヨーロッパでも今や、農業に直接従事する者は少なくなっている。しかし人びとは、旬の食べ物や市場で購入したり親戚から分けてもらったり、また、すでに述べたような季節ごとにおこなわれる祝祭をとおして、そのリズムを体感している。近年では、観光化やエコロジーブームも、その傾向を後押ししているだろう。

農業も自然も、さまざまな社会変化を経てもなお、身近な生活のなかで実感として生き続けているヨーロッパ。それもヨーロッパの重要な顔のひとつであることを忘れてはならない。

キリスト教には、教会制度的な面と人びとの慣習的な面がある。「宗教・信仰」セクションでは、両方を示そうとしている。

キリスト教の教えの中心は、アダムとイブによって死が人類にもたらされ、イエスの受難によって罪が贖われた人類は、イエスの復活によって自らの復活の希望をもつことができるというところにある。そのため、死をどう考えるかは教会の重要な問題である。

### 陽気な墓

ルーマニアのサブツァ村にある「陽気な墓」



陽気な墓。墓地であることを忘れさせる明るく鮮やかな墓標

の墓標は、樫の木にユーモラスな絵と文章で、なくなった村人の一生を表現したものだ。村の職人スタン・パトラシュが数十年前にはじめ、現在は二代目の職人が継承している。民衆による死の受け止め方の一例だ。

教会とは、キリスト者の共同体である神の家である。また教会は信者が実際に集う場所であると同時に、地上の神の国を象徴する。教会堂の建築には、ドームを構造的、象徴的な中心とするビザンチン様式、素朴なロマネスク様式、森林をイメージする高い塔を強調するゴシック様式、たまねぎ帽子で有名なロシア正教会のよ

うなネオ・ビザンチン様式などがある。

### 日常と非日常

日常の慣習的な宗教行為も大切だ。日曜日やイースター（復活祭）、クリスマス、聖母マリア就寝祭などの宗教的祭日といったキリスト教暦の特別な日ともなれば、教会の行事に村人は一番の晴れ着を着て参加する。村はずれにはトロイツァなどよばれる道標が立てられ、村を守る。

巡礼は、人びとが日常から離れてキリスト教の信仰を表現し、体験することを示す。四世紀にキリスト教が公認されると、パレスチナやエルサレムへ参拝する信者が旅行するようになり、また各地の殉教者記念堂も対象となった。サンチャゴ・デ・コンポステラなどが特に有名だ。聖地への旅の過程で、人びとは神とのつながりを再認識して信仰を強化する。

### アイコン崇敬

東方正教会を他のキリスト教宗派から際立たせるのは、「礼拝用板絵」としての「アイコン」へ



ガラスアイコン「最後の晩餐」 地域 ルーマニア  
標本番号 H0211585

の崇敬である。偶像崇拜の禁止は、初期キリスト教においても重要視されていたが、聖者の聖遺物・遺物を祭壇の下におさめる習慣が影響して四世紀中ごろから変化が生じ、アイコン崇敬が生まれた。ただし、立像のイエス像やマリア像は決して用いない。

偶像崇拜と微妙な関係にあるアイコン崇敬は、感覚的なものは超感覚的なものを認識するために必要であり、アイコンは単なるモノではなく、これをとおして神そのものを崇拜する手段であるという考え方に基づいている。キリスト自身神的なものが人間の肉体となつてこの世にあらわれたものであり、目に見えない神がイエスという人の形をとることによって自らを証したからである。それゆえ、アイコンは教会の教えを生活のなかで実際に体験する場を構成する。

民衆が素朴なレベルで理解した信仰を、単純な構図で表現したのが「ガラスアイコン」である。修道士に限らず農民などの世俗的人間も製作した。さらに巡礼をおこなった信者が記念に持ち帰る記念用として販売されたために、巡礼地を中心に広まった。



春祭りと民族衣装。春の喜びを華やかな衣装と踊りで表現する若い男女



大主教祭服 地域 ギリシャ  
標本番号 H0230387 ほか



ドイツ AEG 社の大工場。分業体制のもと労働者は同じ姿勢で同じ作業をおこなう。シルクハットをかぶった労働監督官の姿が見える。1900 年撮影、ベルリン  
 © Staatliche Museen zu Berlin, Museum Europäischer Kulturen



「産業化とともに」セクション、「市民階級家族の生活」コーナー

# 産業化とともに

——一九世紀末〜二〇世紀初頭のヨーロッパ

森明子 民博 民族文化研究部

今日のわたしたちの身の回りには、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてヨーロッパで形をなしたものが少なくない。たとえば社会保険制度は、産業化によって変化した人びとの生活にあわせて、この時代に整えられた。しかしこうした制度のいくつかが、現代破綻をきたすようになってきた。当時の人びとの生活とはそれ以前の生活とどのように変わり、現代の生活はそこからさらに、どのように変わってきているのだろうか。「産業化とともに」セクションでは、近代という時代に生きた人びとの生活を、一九〇〇年ころに焦点をあてて示した。

## 工場機械工業が引き起こしたものの

この時代、それまで職人が手作りしていたものが、工場で大量に機械生産されるようになった。このような生産体制のもとでは、誰がどのような作品をつくるかより、短時間にどれだけ多くの製品を生産できるかが問題とされた。工場生産は分業を組織化することによって成り立ち、労働は働いた時間で数えられるものになった。労働とそれ以外の時間が明確に区分されるようになったことは、人びとの生活にレジャーや休暇という新しい領域を生み出すことになった。

## 既製服産業の発達と家内労働

展示場の一角では、大都市の家内労働として既成服産業をとりあげた。衣服は長い歴史を通じて仕立職人に注文してつくらせるか自分でつくるものだったが、産業化の進んだ一九世紀後半のベルリンで既製服産業が起り、まもなく輸出産業にまで発展した。ベルリンの既製服産業は、当時の大都市で、企業家と職人親方と労働者家族が階層的な分業体制をつくりあげていたことを示している。企業家としての既成服業者は、百貨店や目抜き通りに店舗をかまえ、海外の顧客の注文にも

応じていたが、商品生産は下請けに出していた。生産を請け負った職人親方は、生地を裁断と商品の仕上げをおこない、大部分の縫製は孫請けに出していた。孫受けを担ったのは女性たちの家内労働で、裁断された各パーツをミシン縫製した。ミシンが都市の家庭に普及し、女性の労働力と結びついたことによって、この産業は成立していたのである。

別の一角には、農村の家内労働として亜麻生産をとりあげた。亜麻は栽培から衣類に仕立てるまでの全工程を農家でこなしていたが、産業化とともに木綿製品が普及するにつれて農村から姿を消していった。現代では、ゆきすぎた産業化を批判的にとらえる観点から、自然繊維としての亜麻を見直す動きも起こっている。



労働時間標識（複製）。「1週 54 時間、休憩時間と準備時間を除く」  
 ブラウエンフォークトランド博物館所蔵



1900 年ころドイツで使用されたシンガー社製の足踏みミシン  
 ベルリン国立博物館群、ヨーロッパ諸文化博物館寄贈



ベルリンの既製服産業の一部をなす仕立て職人のアトリエ。1900 年ころ  
 © Staatliche Museen zu Berlin, Museum Europäischer Kulturen

# 多「民族」は共存できるのか ——ヨーロッパのこころみ

庄司 博史 民博民族社会研究部

一九世紀以来、民族と言語を一とする均質な国民国家のモデルを作りあげてきたヨーロッパに、今大きな動きがみられる。「変動するヨーロッパ」セクションでは、ヨーロッパの統合、そして移民の増加が、国民国家にもたらした衝撃と影響から、ヨーロッパの今日をとらえてみた。「ヨーロッパの統合」コーナーでは拡大し続けるEUの動きを追ったが、ここでは、移民の増加とその影響にしばることにする。

## 増加する移民

特に西ヨーロッパの都市にみられる変貌は著しい。定住する外国人⇨移民が完全に風景の一部となっているのだ。労働者、通学の生徒たち、交通機関などいたるところ一見して外国人とわかる人びとが混じる。イギリスやスウェーデンでは外国で生まれた人びとが人口の二割を占めるといふ国はザラで、地域、職種によっては移民出身者が多数を占める。四〇年あまり前、はじめて訪れた北欧で何度か経験した、「黒い髪なんてはじめて、ちょっとさわらせて」などという体験は今日では想像もできない。

## 移民増加の背景

移民増加の原因は、じつはヨーロッパ自身にある。移民の多くは労働移民と難民、さらに彼らの呼び寄せ家族が占める。それらはさかのぼればヨーロッパによるアジアやアフリカの植民地支配と南欧や東欧、アフリカ・マグレブ地域からの労働力補填に発している。かつて移民は国家間の社会的、経済的なプル・プッシュ要因から説明されてきたが、今やもっぱら既存のなじんだ経路を使い流入する人びとはとどまらない。

ともあれ、今日、ヨーロッパの多くの国は、移民の存在抜きではありえない。労働力、購買力、経済や文化の活性化に移民は大きく貢献しており、減少する人口を移民の増加が支えているという面もはや公然の事実だ。そして映像モニターをおして移民が自らのライフストーリーを語るように、ヨーロッパを永住の地として生活する移民も多い。

## ヨーロッパのとまどいと次世代への望み

展示場では、多言語による案内やパンフレットで紹介したが、そのような移民の社会への統合をうながすため、各国は移民への適応教育、公用語教育をおこなう。一方で、移民の文化や言語の存続を認め、保障しようとする動きも広まりつつある。国民国家の基本理念を民族的言語的均一主義から多文化主義に譲るところもあらわれている。

とはいえ、住民がすべて移民を歓迎しているわけではない。一部の人びとのあいだでは、仕事が奪われる、治安が乱れる、異教徒が増える、汚くなったという不平はおさまらない。いきおい移民



「変動するヨーロッパ」セクション、「移民増加と統合政策」コーナー



アジアの食文化とともに各地のラーメンが普及しつつある

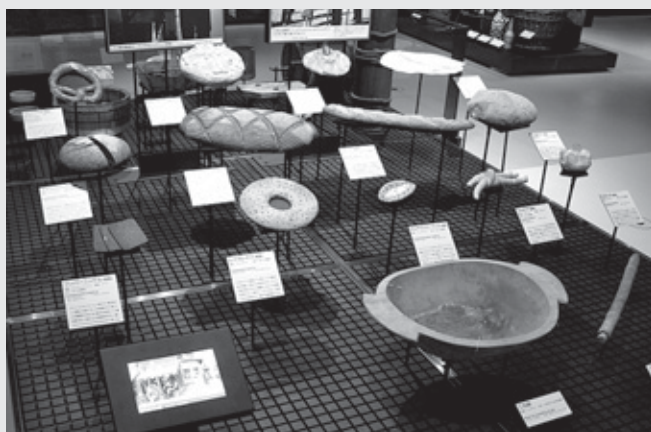
の方もより気楽なコミュニティや集住地に閉じこもる。排除の結果、多数派との生活格差はなくなり、移民は社会的に下層化され、集住地はゲッター化しがちである。ときおり双方のはげ口のないう不満や屈折した憎悪が暴動やテロにつながるや、そらみたことかと移民排斥派の声が高まるのはヨーロッパも同じだ。事態はしかし、それほど悲観的、絶望的なのだろうか。そうは思わない。少なくとも、生まれたときからともに教育をうけ、育ってきた移民と多数派の次世代のまじわりを各地でみるにつけ、偏見や差別のない未来は可能ではないかと希望をもちはじめている。馬鹿なおとなたちの干渉さえなければ。



民族・国籍のかべを超えるのは子どもが先。ソマリア、アフガニスタン出身の子どもたち

# コラム パンからみえる 多様性と共通性

宇田川 妙子 民博民族社会研究部



「生業と一年」セクションのパンのコーナー

パンは、麦作を生業の基本としてきたヨーロッパでは、もつとも基本的な食べ物のひとつである。今回のリニューアルでは、その重要性を示すために、導入部で各地のパン（複製）を展示した。もちろん、ひとりでパンといってもさまざまである。まず、主たる食材の麦についてみると、南ヨー

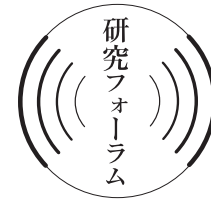
ロッパでは小麦が主だが、寒冷地に行くにつれライ麦栽培が増えるため、北に行くほど黒い色をしたライ麦パンが多くなる。展示では、イタリアやフランスのパンに対して、フィンランドやドイツのパンという対比でもらうとわかりやすいだろう。ほかに、今回の展示では出せなかったが、大麦やエン麦を材料にするパンや、ジャガイモやトウモロコシの粉などを入れるパンもある。

食され方も、日常的な主食としてはかりではない。トッピングなどをして間食的に食されるものもある。そして祝祭などの際には、さまざまな装飾を施したパンがつけられる。この展示では、ブルガリアの復活祭用と結婚式のパンを紹介した。

そもそもヨーロッパのパンには宗教的な意味合いも大きい。キリスト教では、パンは、最後の晩餐にあるように、キリストの身体の特徴でもあるからだ。クリスマスや復活祭などでは各地で特別なパンがつけられ、教会に奉納されたり、家族や仲間たちと分けて食べられたりしている。

かつてパンは、それぞれの家で焼かれていたが、最近ではたいていパン屋で購入され、工場で大量生産されるものも少なくない。しかし、むかしながらの手法で焼かれるパンは今でも人気だし、それぞれの地域特有の味や形のパンは、その土地の自慢でもある。

この展示では、イタリア、ブルガリア、フランス、ドイツ、フィンランドの合計一三個のパンをとりあげたにすぎないが、その限られたなかでも、いろいろな形や色をしたパンをみる事ができるだろう。その多様さをとおして、パンがヨーロッパの人びとの生活のさまざまな側面に強く結びついていることを理解していただけたら幸いである。



# 「感情」から開発実践を考える

せきね ひさお  
関根 久雄  
筑波大学教授

人間による行為は、人間であるがゆえにさまざまな感情がともなう。いわゆる「途上国」における開発援助も、感情からは逃れることができない。本研究は、開発や開発援助の文脈における人びとの「感情」に注目した、実践的人類学の可能性を検討する。

## 論理から感情へ

一般に「途上国」とよばれる社会における開発援助は、科学的・客観的事実に基づいて論理的に構成されるものと考えられてきた。例えば、ある農村における中心的な問題が「稲作農民が貧しい」ことであるとしよう。その原因として「農業収入の少なさ」と「農業外収入の乏しさ」が考えられ、さらに前者については「米の生産高の低さ」と「米価が安く抑えられている」こと、後者については「農業外収入をえるための技術不足」や「農業外収入のための資本の欠落」を理由として発生する、というように、原因と結果の連鎖（因果）から論理的に事態を把握することができるという思考のあり方である。このようにして開発を進めることは、第二次世界大戦後の途上国開発において一貫して見られてきた、いわば常識である。しかし、いうまでもなく開発は生身の人間が営む行為であり、合理（論理）的とはいえないような人間の感情が開発の行方を左右することもある。

## ジェラシーと開発

開発行為における人びとの感情表現として、ジェラシーは比較的わかりやすい文脈といえるかもしれない。筆者が長年調査している南太平洋のソロモン諸島では、ジェラシーがソロモン人によく見られる感情経

るために、数人の村民を隣国バブアニューギニアにある農業学校へ派遣したことがあった。その際、拠点村の住民だけでなくその周りの村々からも派遣員を選抜した。NGOの村民スタッフ、日本人スタッフ共に、周囲からのジェラシーを回避するべく細心の注意を払っており、この措置はその一環にほかならない。一般にソロモン諸島では、開発の文脈におけるジェラシーの感情は、環境問題や土地問題、活動の成果に対する疑いにかかわる語りとして表面化することが多い。それに対して、NGOのある村民スタッフは、ジェラシーを抱く人びとは正しい事実を知らずに語っているだけであるという。どのような開発行為なのか、どのような手続きを経たうえでこの行為であ

るかを詳細に伝えれば、ジェラシー感情が表面化し環境問題や土地問題に発展することはないと述べる。しかし実際にはそれだけではない。開発行為によってその社会のなかで傑出した者には、周囲に事実を知らせる以上のことが要求される。有利な状態を維持するためには、ジェラシーを抱く可能性がある人びとが求める物や期待する行為を、積極的に提供しなければならぬ。バブアニューギニア研修にNGOの拠点村以外からも派遣員を募った行為も、これに相当する。ジェラシー感情への対応は開発行為のプロセスを支配するといっても過言ではないだろう。

## 感情から実践へ

感情に注目する開発研究は、人びとの「ありのまま」の姿（リアリティ）に可能なかぎり接近することを前提とする。開発のプロセスにおいて事態を動かす起点になっっているのは、人びとの身体に湧き出ているはずの感情（例えば、「あいつだけ抜きん出るとは許さない」というようなジェラシー）である。それが言説や身体表現、具体的な行為になってあらわれ出る様相に注目することによって、開発の実践プロセスを読み解くこともできるのではないだろうか。共同研究「実践と感情——開発人類学の新展開」は、開発プロジェクト



NGOの研修センターにおける実習風景

験のひとつとして語られることがよくある。それは、他者が自己よりも経済的に（あるいは社会的に）有利な状態になることに対する否定的な感情的反応のことであり、開発の進展を阻害する一因にもなる。また逆に、ジェラシーを回避することを意識して行動することが、開発プロジェクトの進行を促すことにもつながりうる。

例えば、二〇〇一年から日本のNGOが、ソロモン諸島マライタ島のある村を拠点に自然循環型農法の技術普及を目的とする研修センターを設立して、農村開発活動を展開している。活動の開始当初、そのNGOは、拠点村の住民を研修センターにおける有機技術インストラクターとして育成す



NGOの村民スタッフによるミーティング

にかかわるさまざまな事象を生み出す要因のひとつとして、開発行為に関係する人びとはもちろんのこと、直接それにかかわっていない人びとの感情にも注目しながら開発のプロセスを把握しようとするものである。そして、それぞれの地域の開発にかかわる感情経験の文化的特徴を明らかにしたうえで、最終的にそれを開発実践の実務の場面につなげてゆく方策について考える機会としたい。

これは、「開発は人間による行為」という、あたりまえの原点に素直に立ち帰って開発実践を構想し直す試みである。



研修センターにおける講義の様子。  
マライタ島内各地から研修生を受けている

共同研究  
「実践と感情——開発人類学の新展開」  
代表：関根久雄  
2011年10月〜2014年3月

特別展

◆今和次郎 採集講義——考現学の今  
今和次郎が関東大震災後の日本で創始した考現学は世相を徹底的に観察・記録する学問で、生活文化の変化を捉える視点は民族学の目指すものと同じ。考現学の原点とみんぱくでの展開を紹介し、モノと生活文化の関わりを考えます。

会期 6月19日(火) まで  
会場 特別展示館

◆関連イベント

◆今和次郎が調査した民家の今——瀝青会による『日本の民家』再訪プロジェクト  
今和次郎著『日本の民家』掲載の民家約40軒を90年後に再訪した調査から、私たちの住まいの方の変容をたどり、あわせて、生活空間をフィールドワークする作法について語り合います。

日時 6月9日(土) 15時～16時30分  
会場 第5セミナー室  
※参加無料、申込不要

◆みんぱくゼミナール  
左のページをご覧ください。

◆みんぱくウィークエンド・サロン  
詳細は本誌24ページをご覧ください。

企画展プレ展示  
「写真で見る東日本大震災と被災文化遺産のレスキュー」  
9月開催予定の企画展「記憶をつなぐ——津波災害と文化遺産」で使用予定の写真パネルを事前に公開し、展示の一部を紹介します。

会期 8月21日(火) まで  
会場 企画展示場A

研究公演

「忘れない絆、絶やさない伝統——震災復興と文化継承を願って」  
東日本大震災の影響で存続が危ぶまれた三陸地方に伝わる鹿(しし)踊りと日本に根付いた阪神地方の中国獅子舞・龍舞を通して、震災復興と伝統文化の継承を考えましょう。

日時 6月9日(土) 14時～16時30分  
会場 玄關前広場  
※雨天の場合 講堂(定員450名)  
※参加無料、申込不要  
※公演終了後、本館1階エントランスホールでワークショップを行います。

※6月10日(日)には、神戸の鉄人28号モニメント前で公演を開催します。

お問い合わせ先  
広報企画室 企画連携係  
電話 06-6878-8210

夏のみんぱくフォーラム2012  
知りたい、触りたい、調べたい  
——「みんぱく流」探究のすすめ  
情報社会といわれる今日、博物館は情報をあつめ、発信するためのメディアとして期待されています。新設された探究ひろばを中心にしながら、みんぱくの情報を活用した知的探究の時間をともに過ごしましょう。

会期 6月24日(日)～8月25日(土)

◆関連イベント

◆講演+ワークショップ  
連続講座「博物館にさわる」(全6回)  
「さわる」をテーマにしてユニークな研究・実践に取り組んでいるゲストを招き、幅広い角度から「さわる展示」の魅力と可能性を伝えます。

開催日 6月30日(土)、7月14日(土)、16日(月祝)、28日(土)、8月11日(土)、25日(土)  
各日13時30分～16時(開場13時)  
会場 第5セミナー室(定員100名)  
※参加無料、申込不要

お問い合わせ先  
広報企画室 企画連携係  
電話 06-6878-8210

※この他にもイベントを予定しています。お楽しみに！

音楽の祭日2012 in みんぱく  
1982年にフランスで、夏至の日にみんなが音楽を楽しむ「音楽の祭典」がはじまりました。みんぱくでも、10年連続して世界のさまざまな楽器を使った音楽で「音楽の祭日」を祝います。

実施日 7月1日(日)  
時間 10時15分～16時45分  
会場 特別展示館1階および本館1階エントランスホール

※参加無料(当日は無料観覧日です)、申込不要

お問い合わせ先  
情報企画課 音楽の祭日担当  
電話 06-6878-8532


●無料観覧日のお知らせ

7月1日(日)は本館展示を無料で観覧いただけます。ただし自然文化園(有料区域)を通行される場合は、入園料が必要です。

\*電話でのお問い合わせの受付時間は9時から17時(土日祝を除く)です。


刊行物紹介

■平井京之介 編  
『実践としてのコミュニティ——移動・国家・運動』  
京都大学学術出版会 定価：3,990円



グローバル化は伝統的生活を揺さぶる一方、新たな共同の実践を生み出している。移民ネットワークや自助グループ、人権・環境NGO等、新しい形の多彩なコミュニティをレポートし、その人類学的意味を析出する民族誌。

■陳天璽・近藤敦・小森宏美・佐々木てる 編著  
『越境とアイデンティフィケーション——国籍・パスポート・IDカード』  
新羅社 定価：5,040円



オリンピック参加や仕事など、目的に合わせて移住し国籍を変える。そんな越境の時代、人は誰として生きるのだろうか。法律、生活実践、そしてパスポートなど身分証明を通し、グローバル化する今、人と国籍の関係を問う。

■『民博通信』  
2012 No.136 (3月発行)  
評論・展望  
経験を受け継ぐということ——マダガスカル漁村から  
飯田 卓

みんぱく出版入手方法については  
広報係にお問い合わせください。  
電話 06-6878-8560

みんぱくゼミナール

会場 国立民族学博物館 講堂  
時間 13時30分～15時(13時開場)  
定員 450名(当日先着順)  
参加費 無料(展示をご覧になる方は、観覧料が必要です)

第409回 6月16日(土)

【特別展開連】  
生活財の考現学——高度経済成長期の家庭景観  
講師 栗田靖之(国立民族学博物館名誉教授)  
定田正博(株式会社シー・ディー・アイ代表取締役)


今和次郎の「もちもの」一切しらべ」を高度経済成長後の家庭の生活財に適用した栗田靖之名誉教授たちの研究は、家庭景観という視点で生活文化の現在と将来を見通した論考で、日本生活学会第5回「今和次郎賞」を受賞しました。共同研究者である定田正博氏とともに、当時の生活文化と現在について考えます。

高度経済成長期の家庭景観スケッチ

第410回 7月21日(土)

【探究ひろば関連】  
情報アクティビスト宣言——市民の知的探究と博物館  
講師 飯田卓(国立民族学博物館准教授)

みんぱくは、古いものを展示するだけでなく、さまざまな読みものや映像資料をも提供する総合メディアです。その役割は、インターネットが普及したこんにちどのような意味を帯びているのでしょうか。とくに近年利用が盛んなインターネット上の双方向メディアを意識しながら、市民レベルの知的探究と博物館の役割を考えます。



情報産業論を語る梅神忠夫(みんぱく初代館長)梅榊家から提供

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室  
定員 96名(当日先着順、会員登録必須)

第409回 7月7日(土) 14時～15時  
「みんぱくコレクションをかるる」  
蚊帳に見えない蚊帳のはなし  
講師 白川千尋(国立民族学博物館准教授)  
ラオスの蚊帳は「虫除け」というだけではなく、さまざまな機能があり、女性の嫁入り道具にもなっています。この蚊帳との出会いが異文化にふれる醍醐味を教えてください。民博收藏の美しい蚊帳をじっくりにお見せしながらお話しします。

第410回 8月4日(土) 14時～15時  
ビルマ/ミャンマーの「絆」の力  
講師 田村克己(国立民族学博物館教授)  
ビルマ(現国名ミャンマー)は、今もつとも注目をあびている国のひとつです。ここでは人と人とのつながりがとても大切です。ビルマの人間関係のあり方をおしてこの国の魅力を紹介し、私たち自身の社会も振り返って考えてみましょう。

巡回展開連講演会

7月14日から9月2日まで石川県立歴史博物館にて開催の巡回展「マンダラーチベット・ネパールの仏たち」関連の講演会です。

7月14日(土) 13時半～15時  
「般若心経」と色即是空  
講師 立川武蔵(国立民族学博物館名誉教授)  
「般若心経」はよく読まれている経典も珍しいでしょう。この中の「色即是空、空即是色」という句はインド、チベット、中国、日本において実にさまざまに解釈されてきました。その違いはそれらの国の仏教の特質を映し出しているともいえます。この句の解釈史を通じて日本仏教における空思想の特質を考えてみます。

※「般若心経」のサンスクリーンと漢訳の「吟詠」も試みる予定です。

会場 石川県立歴史博物館学習ホール  
定員 80名(当日先着順)  
参加費 無料

国立民族学博物館 ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112  
FAX 06-6876-0875  
e-mail shop@senri-f.or.jp  
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。  
オンラインショップ  
「World Wide Bazaar」  
http://www.senri-f.or.jp/shop/

オリジナル商品「みんぱくクッキー」

民博ミュージアム・ショップのオリジナル商品「みんぱくクッキー」ができました。

世界各地の仮面のイラストを配したパッケージの中には、ひまわりの種入りと、ミルクティー味の二種類のクッキーが入っています。

このクッキーの製造者「ぶくぶくワールド」は、1988年より大阪府吹田市でクッキーをつくっています。「ぶくぶくワールド」のクッキーへのこだわりは、厳選された材料であり、障害者の側から食の安全に取り組むことで、社会のあり方、弱者、少数の視点、命の大切さなどを考え、発信していきたいとの想いがあります。原材料の小麦粉は国産100%、牛乳やバターは北海道産。オーガニック認定のひまわりの種や、無化学農薬、無化学肥料栽培の紅茶葉などを使用した、身体にやさしく、懐かしい味のするクッキーです。

パッケージのデザインは、武庫川女子大学生活環境学部情報メディア学科の学生さんたちの協力で、民博をイメージして作成しました。



みんぱくクッキー (ひまわりの種入り) 40gと  
ミルクティー味 40gの2袋入り) 450円(税込)

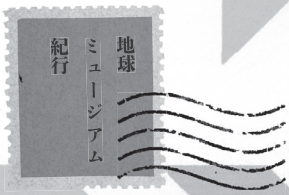


# 市民の都市生活と博物館

## ハーレムのテイラー博物館とその周辺

稲賀 繁美

国際日本文化研究センター教授  
総合研究大学院大学教授



情報のスピードがいまなお加速しつづける現代。  
「おたから」を陳列するだけでは、  
人びとは「ミュージアム」になかなか足を運んでくれないのかもしれない。  
「ミュージアム」のあるまちの景観との調和や、来館者との関係性が重要になりつつある。

### 最古の博物館

二一世紀の一〇年代、たいていの博物館・美術館へはインターネットでアクセスできる。展示内容も居ながらにして概略をとらえることができる。若い世代には、わざわざ海外まで遠路足を運ぶなど、もはや徒勞と見る向きもある。展示品陳列だけでは、とても映像動画に敵わない。入館者数の減少をとどめるには、単独の博物館施設だけでは、もう対応できない。そこで登場するのが複合型のテーパーク展示だろうが、日本の場合、行政の縦割りの制約が足かせとなる。

オランダ・ハーレムのテイラー博物館といえば、現存する最古の博物館といわれるが、博物館の、今後のひとつのあり方を、ここから見出すことはできないか。古代ローマ風の重々しい入り口をくぐると、古色蒼然たる化石や往年の物理・化学実験器具の陳列室に続いて、円蓋の天井から陽光が差し込む、楕円形の天文・地学資料の展示室が広がる。この部屋の中央には鉱物標本を収納したガラス・ケースがあり、当時考えられていた太陽系の模型がケースの天頂部に据えられている。回廊を巡らした吹き抜けの二階部分の壁面は書架となっており、この空間は一八世紀の創建当時の雰囲気や今に伝える努力がなされている。そこを右手に進むと、絵画を並べた回廊や自然誌の部屋がちらちらとあり、科学と人文学とが未分化だった時代の雰囲気も髣髴とさせる。その先の



運河にかかった跳ね橋の上から、テイラー博物館を眺める

中庭は、すっかりリニューアルされて、明るいガラス張りのテラスにカフェが設けられている。充実しているのが購買部で、最近開催された展示の図録のみならず、地球の歴史に関する書籍やCD、恐竜の模型や陶磁器といった記念品から宝飾品にいたるまで並べられている。店番のお爺さんはあらゆる分野に造詣が深く、こぼれ話を交わすことも楽しい。情報収集でもじつに重宝する。

### 都市環境と博物館

このテイラー博物館が、今後の博物館のあり方を見出すモデルになる、というのは、都市全体が現在に生きていながら、歴史都市の景観も維持しており、そうした環境のなかに博物館がきちんと位置づけられ息づいているからだ。

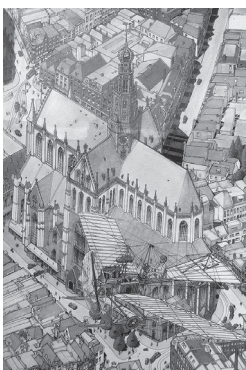
ハーレムの町の中央にある運河沿いの建築群は、その姿を水面に映しており、朝から晩へと太陽が動くにつれて、町は刻々と表情をかえてゆく。ときおり貨物を満載した船が航行すると、水位を調整しては水門が開き、跳ね橋が跳ね、あるいは回転橋が九〇度ぐるりと回転して、船の通航を促す。そうした運河の生き様を前景とするなら、その背後にはハーレムの大聖堂が聳えるようにして控えており、市庁舎とその周辺の広場には、夏の午後など、休息する市民の姿を見かける。

フランス・ハルス美術館も徒歩でわずかな距離だが、こちらは街並みそのものが歴史風紀地区となっている。

オランダの都市でこうした広場の野外カフェに腰をおろすたびに、似たような施設がうまく稼動しない日本の都市生活が情けない。梅雨時は水に濡れ、夏は暑すぎる日本列島では、そもそも戸外の都市生活は満喫できない宿命にあるのだろうか。

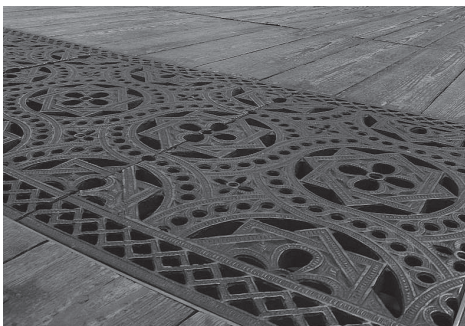


ハーレムの町の遠望 (列車の車窓から)



ハーレム旧市街地鳥瞰図 (書店の飾り窓に貼ってあったポスター)

絵画回廊の床にほどこされた温風送風機の透かし蓋からも創建当時の面影がかんじられる



# ボクシングの文化論 3の3

## ゴング

はじまりのゴングとおわりのゴングに切りとられた時間、ボクサーがまさしくボクサーであるこの時間、すべての動作、呼吸、情動が、ボクサーとしての小さな誇りのために向けられている。拳闘の名譽とはなんだろうか。

### マサオ・オーバのファイト

大場政夫。

この名前を聞いてピンと来るだろうか。日本ボクシング全盛期の一九七〇年代、彼の攻撃的なファイトと、ダウンをとられてもとり返すスリリングな試合展開は、人びとの視線をブラウン管に釘付けにした。世界チャンピオンのまま自動車事故により二三歳の若い命を絶ったことも衝撃的だった。

彼の名を、思いがけずベトナムのホーチミン市で耳にした。現地のボクシング強化訓練チームの監督にお会いし、自己紹介したときのことだ。光栄にも、「あのマサオオーバとおなじマサオだね」と、わたしの名を覚えてくださった。

おどろいたのは、四〇年前のファイトを記憶していたからだけではない。それ以上におどろいたのは、ベトナム戦争さなかでも南ベトナム政権下では、国民が海外のタイトルマッチをテレビ観戦できたという事実の方だ。共産主義陣営にあった北ベトナム政権下では、テレビで海外のスポーツ観戦などまず楽しめなかつただろう。当時の南の豊かさ、あまりのメディア環境の違いを、

程を、「儀式から記録へ」ということばで表現した。彼によると、英語の「記録する」という動詞から「記録」という名詞が生まれたのは一八八〇年代である。

じつはその一九世紀後半とは、サッカー、ラグビー、陸上競技、水泳をはじめとする競技スポーツの全国統括団体が、イギリスで組織された時期だ。競技ごとに、成文化されたルールに則って、空間、時間、人、進行、勝敗などが規格化された。あるゲームの進行や結果が、他のゲームと比較できるようになったのである。こうして、ある達成を記録する意味が生まれた。その意味とは、現在では、とりわけ商業的なものだ。

スポーツが生まれ、「記録」が生まれたのが、産業資本主義の隆盛期に符合しているのは偶然ではない。労働者たちの労働時間が時計によって正確に計測され、給料換算がなされたように、スポーツの世界では、ゲームが時計で計測され、結果が数値化、記録されるようになったのである。

### 流血劇への熱狂



近代ボクシングではクイーンズベリー・ルール（一八六六年）に

よって、リングの大きさ、一ラウンドが三分で休憩が一分という時間、グラブ着用という選手スタイルが決まった。アマチュア・ボクシング協会も一八八〇年にはイギリスで結成された。やはり一九世紀後半である。

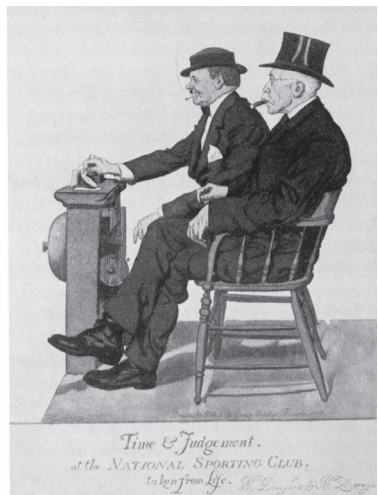
だがイギリスでの最盛期は、一八世紀の素手拳闘にあった。ラウンドは時間制ではなく、一方が倒れると休憩した。試合はノックアウトではなく、どちらかの

痛感させられた。

スポーツ選手は、しばしば「記録に残る選手より、記憶に残る選手になりたいたい」と口にする。

記録の樹立か、観客の感動か、

なにを名譽とするかは人それぞれである。だが、スポーツという社会現象がマスメディアに完全にとり込まれている現在、どちらもマスメディアのとりあげかた次第といっている。たとえば大場政夫は、ベトナムの元ボクサーに記憶されていた。テレビ中継のおかげである。とはいえ日本できえ何十年もテレビなどがとり上げないと、多くの人が悲劇のチャンピオンを忘れてしまう。



ジョージ・ベルチャー『ナショナル・スポーツ・クラブにおける計測係 (J.H. ダグラスと E. ゼルバ)』1898 年。古典的な拳闘ではどちらかが倒れたら休憩したが、スポーツ化のなかで、時間によるラウンド制が導入された。(カシア・ボディ 2011『ボクシングの文化史』東洋書林)

### 「記録する」から「記録」へ

記録について、少しこだわってみたい。昨年、日本人として史上最年少の世界チャンピオンが誕生した。日本人として初の三階級制覇をねらうチャンピオンもいる。このように記録はつねにつくられ、めざされ、更新される。だが古代オリンピックにまでさかのぼると、競技の優勝者の名しか記録されていない。スポーツにおける記録って、なんだろう。

アレン・グッドマンというスポーツ文化史家は、地域の伝統としての身体競技から、一九世紀頃に近代スポーツがでさあがる過体力の限界で終了した。八〇ラウンド以上闘うこともめざらしくなかった。観客は、勝敗だけでなく、どちらが先に流血するかも賭けの対象にし、この長い流血劇に熱狂した。八百長が蔓延したことは、いうまでもない。

だが、軍隊や警察など国家による暴力の独占が進むと、私闘は禁止される。暴徒化しがちな観客に対する取り締まりも強化され、素手拳闘の興業は衰退する。その背面から、スポーツとしてのボクシングは立ちあがってきたのである。

### 男らしさ

素手拳闘の拳闘家にとって、力強さ、勇敢さ、忍耐強さが男らしく、名譽であった。相手のパンチをよけるのは男らしくなかった。フットワーク、ジャブ、防御に重点を置くスタイルで、一八世紀末にチャンピオンとなったユダヤ人拳闘家ダニエル・メンドーザ（一七六四—一八三六）が、臆病者よばわりされたのも無理はない。シユガー・レイ・レナード、ナジーム・ハメド、川島郭志などが披露したディフェンスの超絶技巧は、一八世紀なら男らしくなかったのだ。

現在の男性ボクサーにとって、勝つことは男らしい。もちろん、勝利を前提とした記録達成も名譽である。だから新聞や雑誌はタイトルの防衛回数、制覇した階級数、連続KO回数などを華々しく書き立てる。記録と、その更新可能性までもが人びとの関心をかき立て、消費を刺激するからである。

とはいえ、マスメディアで注目される選手など、ごくわずかにすぎない。煌々と照らされたリングに、派手なガウンをまとって登場し、アナウンサーに声高々と紹介されるボクサーたちは、一見はなやかだ。しかし、日本では世界チャンピオンでさえも、ふつうはほかの仕事で生計を立て、空いた時間に練習し、減量苦に耐え、リングに立っている。終了のゴングが鳴り、会場を後にすると、どちらかというに慎ましかな家庭に、男らしさだけではわたっていけない日常に、彼らは回帰していくのである。

梶永真佐夫

民博研究戦略センター

# 国境・障がいをくぐる商い

— one village one earth —

今井孝子  
和気克子

one village one earth

フェアトレードと聞くと、ともすれば遠い世界の出来事と考えてしまいがちになる。しかし、フェアトレードが介在するさまざまな人びとの交流は、わたしたちが抱えている問題を解決する糸口を秘めているかもしれない。「めざら」の「meza」はつながっている。わたしたちと「地続き」の出来事であることを忘れてはならない。

## 地球はひとつの村

one village one earth (ワンレッジワンアース) という名前は、地球をひとつの村と考え世界中の出来事を同じ村の出来事としてとらえ行動したいというわたしたちの思いから名づけた。おもにバングラデシュとタイの生産者団体とパートナー取引をおこなうフェアトレード団体である。神戸に直営店をもち、店舗ではパートナーから仕入れた製品の他、他のフェアトレード団体が輸入した製品や国内の障がいをもつ人たちがものづくりする作業所の製品も販売している。

一般にフェアトレードとは発展途上国の生産者の持続的な支援を目的とする取引のことを指す。しかし、障がい者も、効率と利益を優先する社会のなかで、手仕事で生計をたてるという困難に挑戦している点は共通である。そのため両者を区別する必要はないとわたしたちは考えている。実際、店舗の売上げの四分の一は作業所の製品が占めている。

店は二人で経営している。障がい者アートの魅力を感じ生活者としてアンフェアなもの環境に悪いも水準になるまで何度もやりとりをしてようやく売れるものができるようになった。しかし隊員の帰国後、生産者グループと現地NGOの間のトラブルにより、グループが消滅してしまった。わたしたち指導した隊員、技術を習得した生産者、みなが非常に残念な思いをした。

一方、生産者グループをしっかりとマネージメントできている現地のフェアトレード団体が介在している場合は安心してつきあえる。とくにWFTO(世界フェアトレード機関)に加盟しているいくつかの団体と取引があるが、どこも商品開発に熱心でこちらの要望に臨機応変に対応してくれるので、継続的に取引を続けるために大変ありがたいパートナーとなっている。

前述のザンビアでの商品開発には後日談がある。ザンビアより帰国した青年海外協力隊OBを尼崎市(あまつかみ)の精神障がいの人たちが働く作業所に派遣し、ザンビアの布でワンピースづくりを指導してもらった。直線縫いでブックカバーなどをつくっていた人たちがワンピースをつくれるようになったことから商品単価が上がり、工賃がアップした。こうして施設利用者が自信をつけることができた。

フェアトレードでえた経験は、地域で活かすことが可能である。わたしたちはフェアトレードと障がい者作業所の垣根を越えて活動したいと考えている。海外経験のある人材を地域で活かす、地域で育った人材を海外で活かす。まさに地球はひとつの村なのだ。

のは使いたくなかった和気と、国際協力団体での活動経験からフェアトレードに関心をもち始めた今井それぞれ神戸でフェアトレードショップを営んでいたが、もつと生産者と繋がり、より深く幅広く活動していくために二〇〇九年に結成したのが当団体である。今では海外の生産者団体は一八団体。作業所は二団体と取引先も増えた。

## 海外生産者との取引

店を構えているせいか、青年海外協力隊で活動している現役もしくはOBが自ら開発した製品をもち込んでくる人が多い。すべてのリクエストに応えられるわけではないが、せっかくなので技術も売り先がないままでは途絶えてしまうので、できるだけ対応したいと思っている。ザンビアで村の女性たちに洋裁指導をしていた隊員からは、東アフリカのプリント布チンゲでバッグやパンツをオリジナルでつくって送ってもらっていた。学校に行ったことがなく鉛筆を始めてもった女性たちは定規を使って線を引くことも難しかったという。店頭で販売でき

## 手づくりを商う

one village one earthのベストセラー商品はバングラデシュのノクシカタ刺繍(しゅう)のグリーティングカードだ。隙間無くびっしり刺された刺し子と美しい刺繍を施した贅沢な布(フクシカタ)がグリーティングカードに仕立てられている。南西部の都市クルナのカリシユプール女性縫製プロジェクトと首都ダッカのジャゴラニ・ジユート・ハンディクラフツの二団体に発注している。伝統工芸ノクシカタは地方、村によって異なっており、前者は素朴な刺繍と細かい刺し子、後者は首都ならではの洗練されたデザインを特長とする。いずれも、デザインを考える、作業場でデザイン画を写す、自宅で刺繍する、刺繍布にアイロンをかける、マットに刺繍布を貼るなどのさまざまな作業を、たぐさんのつくり手が分業しておこなっている。封筒は、ダッカのプロクリティの手漉き紙だ。二年ほど前からノクシカタカードを凌ぐ人気を集め始めたのは同じくバングラデシュのジユートミニマツだ。織ったジユートに色とりどりのクロスステッチを施してある。どちらも四〇〇円前後、この価格帯が今の消費者に受け入れられやすいのである。高価な物が売れにくい時代である。大量生産でコストをさげ少しでも安い物を供給することが求められる現在、手間がかかった手仕事のよさは、わかっている。わらいにくい。しかし、わたしたちはつくり手たちが働く喜びを感じ、手仕事ゆえに消費者がつくり手に思いを馳せ大切に使用したいと思う、そんな品を商うことが公平な貿易フェアトレードだと考えている。



バングラデシュ、ダッカのフェアトレードNGOで、ジユート製品を見せてもらう

ジユート・ミニ・マット



ノクシカタ・カード



バングラデシュ、クルナの修道院を拠点とする団体でノクシカタの図案を写している女性



尼崎の作業所での洋裁の指導



ザンビア、ルサカのNGOで洋服をつくっている女性たち

神戸元町の店舗

# 迷える「玉座」

田村 克己 民博 民族社会研究部

## 王朝時代の玉座

今、ビルマ（現国名ミャンマー）は、急激な動きと変化のなかにある。その大きな契機のひとつとなったのは、昨年（2011年）の米国のクリントン国務長官の訪問である。ところで、彼女のような賓客とミャンマーの大統領とが会談している後ろには、かつての王朝時代の「玉座」が控えていたことに気づかれたろうか。玉座は「獅子の玉座」とよばれ、王と王権を象徴している。玉座はかつてマンダレーの王宮にあって、四方の倍数の八基（実際には九基）あったという。一九世紀半ばに英国の支配下になると、王宮の宝物の幾つかが英国等にもち去られるが、この玉座も一基が当時英領インドのカルカッタの博物館に移された。しかし、これが結果的に幸いすることになる。その後、第二次世界大戦の戦火のなかで玉座は王宮とともに焼失するが、もち出されていた一基が残り、一九五四年に返還された。今ヤンゴンの国立博物館にて展示されており、上述の会談の後ろのものは、二〇〇六年に新しく首都となったネーピドーにあるレプリカである。



王朝時代の「獅子の玉座」。王と王権を象徴する

## 新首都・ネーピドー

ネーピドーは一般に「都・王都」を意味する語で、先のマンダレーは「ヤダナボウン・ネーピドー」、すなわち「宝石のような都」という優雅な呼び方がつけられていた。そして、現在のネーピドーが広大な土地を切り開きつくられているのと同じく、マンダレーも、エヤーワディー川中流の左岸に、基盤目状の街づくりをした計画都市であった。この点で、現在の政権は、植民地化の危機にあって外国勢力と対峙した時代をなぞらえているともいえよう。それは、王朝時代の栄光の回復、伝統的な王権の再生を目指すものである。ヤンゴン（ラングーン）が植民地化の過程で築かれてきたことを考えると、新しい都は、英領時代から続いてきた西欧にならう近代化の流れを断ちきり、克服することを意味しているのかもしれない。

ところで、「玉座」を新首都にもって行こうとしたときに、守護霊がいるのでヤンゴンから離すと良くないと占い師が言ったとのことである。そのため、本物は元の場にとどまることになったという。このような話が人びとにまことしやかに語られているところに、岐路に立つこの国の今のありようがうかがえる。

## みまぐ 私の逸品 マザンキ

標本番号 H0146123  
地域 ポーランド共和国  
受入年 1986年

民博 外来研究員 マジエツツ・アグネシカ

一九八六年に、ポーランドからマザンキという楽器がみまぐにやってきた。収集データには、一九世紀につくられ、ヴィエルコポールスカ地方である楽隊が使用していたことなどが書かれている。マザンキとは簡単にいうとヨーロッパの民衆のあいだでつくられ用いられていたバイオリンの原型のようなもので、ギョギョ荒っぽく演奏されることから、殴り書きを意味する「マザチ」ということばにちなんで、その名がついたらしい。そんなマザンキは、ポーランドにおいて文化的に重要であったばかりではなく、ポーランド人のアイデンティティを形成するもののひとつであると言っても、過言ではないのである。

一〇〇年あまり前に、シェンキエヴィチという作家が活躍していた。彼の文学作品のなかに、「ヤンコ君」という短編小説がある。それは、農村の貧しい生活を描いたもので、田舎の住民への教育の必要性を訴えるなど、当時の世相を反映した社会的作品であった。主人公のヤンコ君は一〇歳ぐらいの少年で、生まれつきからだが弱く、農業の手伝いなどは一切できなかったが、あるひとつのことに熱意をもっていた。どうしても本物のバイオリンを弾きたかったのである。バイオリンを手に入れる余裕がなかった彼は、木の塊を彫り、二本の弦を張って、自分なりのバイオリンをつくったが、その出来栄はみすばらしいものだった。その後、音楽にかけるかたくなな情熱はかえってヤンコ君に悲劇を招いてしまうのだが、読み手を感動させる物語であった。

シェンキエヴィチは一九〇五年にノーベル文学賞を受賞し、今日彼の文学作品は後世の母語教育の教材となっている。つまり、ポーランドで義務教育を受けた人は、ヤンコ君が彼の自作の「バイオリン」を弾いている場面が記憶のどこかに残っているのだ。したがってポーランド人であれば、みまぐにやってきたこのマザンキを見て、きっとヤンコ君の楽器を連想するにちがいない。



# 文人が聴くドビュッシー

## ドビュッシー生誕一五〇周年に寄せて

岡本尚子  
おかもと なおこ  
民博 外来研究員

### フランス音楽の引力

目の病をわずらうなか、ピアノを学び始めた民博初代館長・梅棹忠夫は、自分がピアノ演奏会を開くとしたらプログラムに入りたい曲として、シヨパン、サティ、ラヴェルの曲とともに、ドビュッシーの『亜麻色の髪の乙女』を挙げています。梅棹はモーツァルトやベートーヴェンなどは好みではないとも述べており、どうやらフランス音楽を好んでいたようだ。

「ピアノのレッスン」に通うと、始めのうちは大抵、バイエルやツェルニー等ドイツ系の音楽を中心にレッスンが進められるが、そうしたなかドビュッシーなどのフランス音楽に触れて、新鮮に感じる人は多いのではないだろうか。筆者は、初めてドビュッシーの曲を課題として与えられたとき、それまで練習していた曲とはまったく違う、不思議な響きに魅了されたことを良く覚えている。

### ドビュッシーをめぐる音楽批評

二〇一二年はクロード・ドビュッシー生誕

家など、「限られた人のためのもの」とされてきたということである。ドビュッシーの音楽をめぐる熱狂は、そうした事態の打開にも一役買っていたと推測できる。

### 文人の音楽批評が示すもの

ところで、フランスではさぞかしドビュッシーは崇拜されているのだろうと思いきや、筆者の周りのフランス人音楽愛好家が好むのは、どちらかといえばイタリアやドイツの歌劇や交響曲、リストやシヨパンといったロマ



『ペレアスとメリザンド』初演がおこなわれたオペラ・コミック座

一五〇周年の年であり、国内外で彼の作品をとり上げる演奏会や催しが数多くおこなわれている。一八六二年八月二日生まれこのフランス人作曲家が、マラルメの詩に靈感をえて作曲した『牧神の午後への前奏曲』は現代音楽の祖と評されることもあり、ドビュッシーは作曲家として、音楽史上で重要な位置を占めているということができるだろう。そして、ドビュッシーの音楽は、音楽の専門家よりもより、文人を中心とした当時の多くの知的エリートに熱狂的に迎えられたことは注目に値する。

ン派の音楽であるようにも感じられる。パリ郊外サン＝ジェルマン＝アン＝レー市にある、ドビュッシーの生家を改装した記念館は、ごくこぢんまりしたものだし、パッシー墓地にあるドビュッシーの墓は、いつ訪れても閑散としているのだ。

ロランは、歴史的・学術的にはドビュッシーを評価すべきだとしつつも、力強いドイツ音楽や感情表現豊かなイタリア音楽の方が好みであり、フランス人作曲家ならビゼーやベルリオーズの方が好きだと断言しているが、

保守的な音楽家や評論家がドビュッシーを批判するなか、例えば作家ロマン・ロランは、「一九〇二年のドビュッシー氏の『ペレアスとメリザンド』は、フランス音楽の真の解放の日付を刻んだように思われる」とし、フランス音楽の未来をドビュッシーに託した。自由な形式と斬新な響きをもつドビュッシーの音楽は、それまで著名な音楽家を輩出していない（故に独自性が確立されていない）フランス音楽の個性を確立するのに有効だと、ロランは評している。

そもそもドビュッシーは、象徴派を始めとする詩人や文人たちと親しかったこともあるのだから、文人たちはドビュッシーの音楽に象徴派の芸術との共通点を見出し、新しいフランス芸術の旗印として歓迎した。ロランのほかに、ジャック・リヴィエール、アンドレ・シュアレスといった文人たちが、ドビュッシーの音楽についての賛辞を送ったが、とりわけ彼らが音楽を「特定の人のためのものではない」としているところは、興味深い。ここから見えてくるのは、音楽が貴族や専門

おそらくこちらの音楽の方が、ドビュッシーの音楽と比べて「明晰さ」を感じるのではないだろうか。そしてそれは、いわゆる「フランス精神」を代表するものでもある。（もちろん、ドビュッシーの音楽を形容する際に良く使われることばである「繊細さ」も、「フランス精神」を代表するものではあるのだが。）しかし、この後音楽史上で評価されるのは、常にドビュッシーとその後継者たちであり、彼らによってパリは世界の音楽界の中心となったといっても過言ではない。こうしたなかロランは、第一次大戦後同世代の音楽家たちに背を向けて、自分が好きなベートーヴェンの世界に閉じこもってしまった。

ロランを始め文人の音楽批評は、ともすれば単なる好みに過ぎないと批判することも出来るだろう。しかし、ドビュッシーを巡る彼らの批評が示すように、音楽史の「教科書」からは読みとれない多くの真実を含んでいるのである。



ドビュッシーの生家を改装した記念館。一階は市の観光局、二階が展示室になっている



記念館の中庭から2階をあおぐ



記念館の展示室。東洋風の置物などが置いてある



ドビュッシーの墓（パッシー墓地）

6月

みんなくウィークエンド・サロン

# 研究者と話そう

■展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。

どんどん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

3日  
(11月11日)

時間：11時から12時

話者：久保正敏（国立民族学博物館 教授）

話題：民博の考現学遺伝子

会場：特別展示館

10日  
(11月11日)

時間：14時30分から15時30分

話者：杉本尚次（国立民族学博物館 名誉教授）

話題：民俗建築学者群像：今和次郎を中心として

会場：本館展示場（ナビひろば）

17日  
(11月11日)

時間：14時30分から15時30分

話者：久保正敏（国立民族学博物館 教授）

高橋晴子（大阪樟蔭女子大学 教授・元客員教授）

話題：近代日本の洋装ときもの

会場：本館展示場（ナビひろば）

24日  
(11月11日)

時間：14時30分から15時30分

話者：野林厚志（国立民族学博物館 教授）

話題：民博流探究のすすめ

会場：本館展示場（ナビひろば）

## 1年間みんなくに何度でも入館できる「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいあります。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引

◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引

◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。

(電話06-6877-8893/平日9:00～17:00)

## 編集後記

正直なはなし、ヨーロッパへの漠然としたあこがれは、以前はわたしもふくめ、だれにしも多少はあったとおもう。しかし近年、自身の調査やさまざまなメディアを通じ、ヨーロッパ各地での貧困や混乱、暴力など、あこがれのヨーロッパらしからぬ側面に触れるなかで、それまで抱いてきたイメージがかなり修正されてきたことは間違いのない。それだけ相対化されたヨーロッパ像が一般にも浸透し、単なるあこがれや礼賛の目ではなく、客観的な目で観察する余裕ができたともいえよう。民博のオープンから今日までの30余年がまさにそのような時期であった。とはいえ、今日もヨーロッパを訪れるものにとって、特に重厚で歴史観にみちた都市の造り、成熟した市民意識の存在には、やはり圧倒されることもしばしばある。展示には、展示されるものと同時に展示する主体も反映されるという。ならば今回のヨーロッパ展示には、何が映っているのだろうか。展示を担当したひとりとして、ぜひ知りたいところである。(庄司博史)

●表紙：ヨーロッパ各地のパン（複製）。いずれも妻を材料とするが、食され方は地域によってさまざま。ヨーロッパ展示場で展示中。

## 次号の予告

特集

## 世界をさわる手法を求めて ユニバーサル・ミュージアムの可能性(仮)

月刊みんなく 2012年6月号

第36巻第6号通巻第417号 2012年6月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1

電話 06-6876-2151

発行人 八杉佳穂

編集委員 庄司博史（編集長） 樫永真佐夫 久保正敏

菅瀬晶子 山中由里子

編集アドバイザー 山内直樹

デザイン 宮谷一敦

制作・協力 財団法人 千里文化財団

印刷 日本写真印刷株式会社

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

## 交通案内

●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分

●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。）

●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通ください。

●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。



みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

